

第80回 シチズンシップと防災

IT生

ウクライナ紛争で問われているのは戦争の是非論などではない。シチズンシップを維持できるかどうかという基本的生存権の問題だ。それを守れるかどうかという国民、民族の尊厳は生死をも超えると考えべきだろう。

日本では、生きるために国を放棄せよという論調もあるが、ウクライナ国民にとってその選択肢はない。ロシアの全体主義と、ウクライナのシチズンシップの闘いとみているから、西欧諸国は支援を惜しまない。しかし、支援人材、物資は提供しても軍隊は派遣しない。それは、この戦いは、あくまでウクライナ国民が解決する問題だとみているからだ。



ウクライナの抵抗ぶりを知ることができる良書

ウクライナへの支援は、西欧諸国に限らず、全世界に広がっている。このことは、巷間いわれるような第三次世界大戦への懸念などではなく、世界の人々が、ウクライナの人々の行動をみて、シチズンシップを思い起こされ、共感しているからだ。人間社会の紛争だけでなく、近年世界規模でひろがる温暖化にともなう気象災害の激甚化に向き合うべきわれわれの姿勢も、自立したシチズンシップが問われている。

その警鐘のひとつの現れが、国連が提唱する SDGS であったりするのだ。
自然や多様な価値観をもつ他者について正しい知識をもち、お互いを尊重するシチズンシップを学ぶための指標なのだ。

久しぶりに寺田寅彦師の言葉を引用したい。

「私は、日本のあらゆる特異性を認識してそれを活かしつつ周囲の環境に適応させることが日本人の使命であり存在理由でありまた世界人類の健全な進歩への寄与であろうと思うものである。世界から桜の花が消えてしまえば世界はやはりそれだけ淋しくなるのである」。文中の「桜」を「ひまわり」にかえて、ウクライナの人々に思いを馳せたい。

(令和4年3月)